



●選書ツアーを開催しました！

5月25日に、今井書店田和山グループセンター店にて選書ツアーを開催しました。

選書ツアーとは、学生さんに「図書館に置いてほしい・授業で使えそうな本」を書店へ出向いて実際に選んでもらおうという企画です。今回は、総合理工や法文学部から総勢15名の参加がありました。予想に反して、男子の参加者が多かったです。（でも、女子も明るく負けていませんでした！）

今回選んだ本は、後日行われる検討会で図書館に置くのにふさわしいか参加者で検討します。どういふ本が選ばれるのか、請うご期待！！

天候にも恵まれ、和気あいあいとした雰囲気
のなか、みなさん思い
思いの本をじっくり選
んでいましたよ。

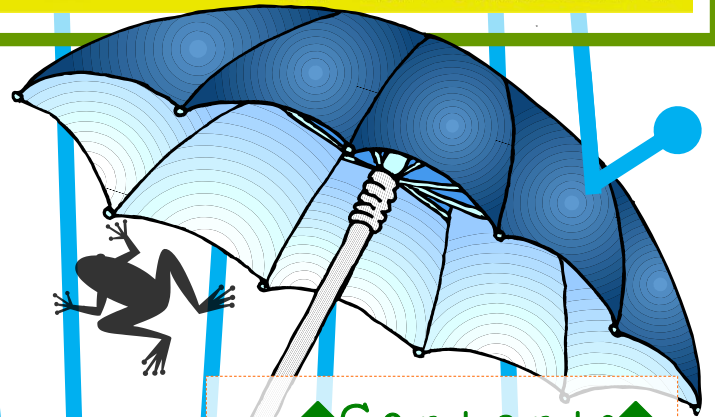


●ブログ始め(て)ました

ブログにて図書館コンシェルジュの活動状況を発信中です。コンシェルジュの生の声が聞けます。

図書館コンシェルジュとは、図書館での学生の学びをサポートする学生です。

図書館での疑問質問ウェルカムです。1F サブカウンターにてお待ちしております。



◆Contents◆

<トピックス>
選書ツアーを開催しました！
フログ始め(て)ました
おしえて★ライム博士

<お薦め図書>
『死刑囚最後の晚餐』

<つぶやきライム>
エピソード(本と私)

おしえて★ライム博士

あの小さい机は何のため？

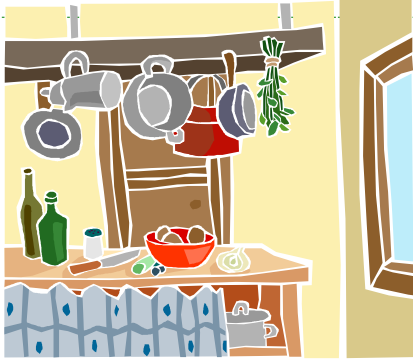
元の場所がわからなくなった図書を置いておく場所だよ

図書館の通路にある小さい机。この机は元の場所がわからなくなった図書を置いておく場所です。



自分で出した図書は自分で戻すのが原則です。しかし場合によっては、元あった場所を忘れてしまうことがあります。図書館の図書は決まった順番で並んでいるので、間違った場所に入れてしまうと二度と見つけられなくなってしまいかもありません。そんなときはこの机を利用してください。

但し、貸出をした図書は返却が必要なので、忘れずにカウンター横の返却口まで。



<お薦め図書>

死刑囚最後の晩餐

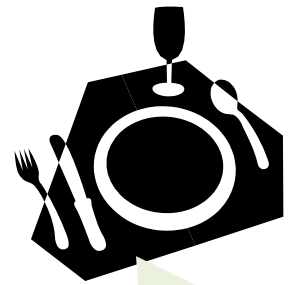
タイ・トレッドウェル、ミッシェル・パーノン著；宇佐和通訳

アメリカの死刑囚は、刑執行直前の食事を自由に選ぶことができる——このトリビアはきっと多くの人が聞いたことがあるだろう。では実際の囚人たちの「最後の晩餐」について、どのくらいのひとが知っているだろうか。

この本は、食事と彼／彼女が起した事件のあらましと「晩餐」66名ぶん（コラムを含めると更に多くなる）をずらりと並べたものだ。それだけでもずいぶん壮観だが、なによりウィットがきいているのは、まるで料理本のように、春夏秋冬それぞれの季節ごとに章が区切っていること。これによって、どの季節に処刑された人物が何を食べていたかわかるようになっている。

死刑囚の食事は、刑務所のキッチンでつくられることもあれば、近隣のレストランから配達されることもあるようだ。私がおっとも好きな「晩餐」は、チャールズ・ウォーカーのもの。彼は強盗殺人によって24年間刑務所にいた。彼がリクエストしたのは、野ウサギのソテー、ビスケット、ブラックベリーのパイ。ベリーはともかく、野ウサギなどそうそう手に入るとは思えない。しかし、刑務所のスタッフは自分たちで材料を捕まえ、調理したという。

端々に見える人と人との交流に胸を熱くするのも、末尾に記された刑務所のレシピにチャレンジするのも、真面目に死刑とは何かと自問するのも楽しい一冊。 (sugar) 【326.953/Tr3 1F 閲覧室】



<つばやきライム(16)～図書館職員のメッセージリレー～>

エピソード(本と私)

小学校低学年のころ。夕方の図書室はカーテンが閉められていて薄暗く、背筋をピンッと伸ばした本の行列がちよつと怖かった。しかしそこはかくれんぼには最適な、私の遊び場の一つ。身をひそめながら夢中になって本を読んでいたこともある。真っ先に頭に浮かぶのは『合成人間ビルケ』。詳細は忘れたが、妙にリアルな絵に衝撃を受けたことを覚えている。



中学生になると、気に入った本をお小遣いで購入できることが嬉しかった。好きだったのは赤川次郎さんの推理小説。朝読書の10分間では読み足りなくて、終礼後、誰よりも早くグラウンドに飛び出して、部活動が始まるギリギリの時間まで読み続けていた。

休みの前日は、よく図書室に行った。『明日があるなら』。思わず手に取った表紙には、銃口を自分の頭に向けた女性の潔い後ろ姿があった。そのまま上・下巻を借りて朝まで読みふけた。睡魔と好奇心との闘いだったが、ページをめくる度に終わりが近づくのを感じながら、次の展開を想像するのが楽しかった。あの感覚はちょっと特別なもの。



そして現在。私は島根大学附属図書館で古い書籍と向き合っている。そんな中、

「この本を最初に触った人は、もうこの世にはいないんだな」という I さんの言葉。本当に、この1冊の本に誰がどんな思いで関わってきたんだろう。

紙の感触、本の大きさ、厚さ、字の大きさ、行間、そして絶妙な挿絵。「本」は実によく考えて作られていると思う。時代を反映し読者のニーズに応えた本。人の手から手へ、「作り手」と「読み手」の思いを想像できるのが、「電子書籍」にはない「本」の味だと思う。時には大きくて重たい本を開いてみたり、文庫本を鞆に忍ばせたり、真新しい本にドキドキしたり、古本屋で珍しい本に出会ったり……。次代の子どもたちにも、そのような経験を通して自分なりの感性を育ててほしい。私自身これからも、本を通して大切な人たちとの繋がりを深めていけたら嬉しい。

(u. f)

この図書は人文社会科学研究所 修士2年の図書館コンシェルジュ推薦です。



(みいなちゃん)

毎日まいにち、雨雨雨。服も靴も濡れちゃう。



(ライム博士)

みいなちゃん、その濡れた靴に入ってるのは図書館の本かい？水は本の大敵だよ。濡れないように工夫しないと！



(みいなちゃん)

あ！…(ゴソゴソ)…よかった、大丈夫だったみたい。頑張ってるノートも大事だけど、借り物の本も大事にしないとね。



(けんさくくん)

ちょっといいかな、僕の傘、どこ行ったか知らない？



(ライム博士)

うーん、私にもわからないなあ。図書館にもたくさんの忘れ物・落し物が届くけれど、ほとんど名無しだからね…。

傘立てが不安な人は、傘袋に入れて館内に持ち込もう。傘袋がもったいないけれど、これも大敵から本を守るためだからね。